

基調講演「命を守る防災」

群馬大学広域首都圏防災研究センター長・教授 片田敏孝さん

片田教授

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました群馬大学の片田です。滋賀県の流域治水のプロジェクトには、これまでも何度か関わりを持たせていただいております。正直な話ここ最近ずっと頭の中が津波のことばかりで、久しぶりに川の話ですから今日この場でどんな話をしたらいいのかと、正直そんな感じです。でも基本は同じことです。時に自然は大きな振る舞いをする。ハードというのは、そこに必ず想定外力というのがあり、そしてそれを超えてくるものがあります。その時にはやはり人間そのものの対応力がポイントになってくるのです。ハード・ソフトの両輪で全体の安全をどう確保するべきなのか、そんな議論を展開するのは津波でも洪水でも一緒だと思っています。

「防災って何？」と言うと、やはり「命を守ること」そのものが防災だと私自身は思っています。もちろん経済被害の話はあります。けれどもまずは命でしょう。では命を守るにはどう対応すればいいのでしょうか。特に津波では逃げるのみです。先ほど知事からも紹介されましたが、そのような観点から子ども達に津波避難の三原則ということを教育してきたところですよ。

ただ災害の種別が異なると若干話も変わってきます。洪水の場合、ただただ逃げろというわけにもいかない。逃げている途中で犠牲者が出るということもある。今日は久しぶりに洪水の話なので、少し歯切れの悪いところがあるかもしれませんが、ご了承下さい。しばらくお相手していただければと思います。

ここ滋賀県では、津波よりも豪雨災害の方が重要でしょう。今年を振り返ると、新潟豪雨がありました。そして12号台風と15号台風です。これからの災害を暗示するような災害であったと僕自身は思っております。特に15号台風では、降った場所はオーソドックスなゾーンでしたが、ひと雨で1,000mmぐらい降りました。一回の雨で1,000mmというのはすごい雨ですが、これが気がかりなのです。何が気がかりかということ、この台風の動きそのものです。動き始めて975ヘクトパスカルから940ヘクトパスカルまで、日本の近海で台風が急成長するのはこれまでにないことです。日本の近海にすれば、台風は勢力を弱めて、そこそこの恵みを持って来てくれるというのがこれまでの台風のイメージでした。しかし、動き始めたと思いきや、一気に勢力を拡大していきました。明らかに地球温暖化の影響の中で、こういう状況が見られるようになってきました。したがってこれから巨大台風に襲われる可能性が極めて高いと言わざるをえない。それから、12号台風です。ひと雨2,400mmというのはこれまでの経験からはあり得ないですね。

これまで我々が経験しなかったことが起こってくる。典型的には天然ダムを形成するような土砂災害が起こっています。通常の土砂災害であれば地表面の5分、6分の土砂がずれる程度ですが、ここまでの雨が降ると、いわゆる深層崩壊と言って60分、70分という深さ

に滑面ができ、山が根こそぎ崩れ膨大な土砂が川を塞いで、こんな天然ダムを造ってしまいました。

土木研究所がまとめた深層崩壊危険度の水準マップを見ると、滋賀県の周りも非常に可能性が高いゾーンに囲まれている状況です。(マップの) 赤い丸の所は過去に実績があるということですが、近いところにもかなりあるという状況です。このような巨大な雨が降るようになると、滋賀県でもこのようなことも念頭に置いておかないといけません。

この傾向がこれから深刻化するの明白です。地球温暖化が進むと熱帯低気圧が増加するというの皆さんもご存じだと思います。今、全世界で起こっている台風、ハリケーン、サイクロンの合計が36個ぐらいあり、そのうち「巨大」と分類されるのは3つです。地球シミュレーターで計算すると、台風や熱帯低気圧の数そのものは1/3に減りますが、「巨大」なものが3個から6個に倍増すると予想されています。例えば伊勢湾台風や室戸台風級のような大きいものです。これが倍増するということです。

ただ、ここのところ台風の話が多いので、台風の数が減るというのはイメージと合わないのかも知れません。しかしこれは現実です。例えば、去年の台風の発生個数は史上最低でした。結局14号まででした。このように減る傾向は確認できていますが、一方で台風の1個あたりが非常に巨大化する傾向も顕著です。これからは、台風の数は少ないけれども、1個1個が非常に大きくて、大きな被害をもたらす傾向が顕著になるという自覚が必要です。特に台風銀座の場所が変わるという感じがしています。夏の暑いときに高気圧が張り出している状態では、通常、台湾から沖縄近海の辺りで台風が発生します。高気圧が張り出しているためこの辺りでは発生できません。最近ではここで発生して日本海側を進む傾向が非常に強くなっています。日本のこの時期が暑い時です。夏の高気圧が引くと、今度は日本近海のこの辺で台風が起こります。もともと台風は赤道辺りで発生していましたが、現在、ここで発生しづらくなってきています。赤道あたりは今、地表面から上空まで空気が全部温まっているため、大気が安定してしまい対流が出来なくなっているからです。その代わりに日本の近海で台風が発生するようになっているのです。

海水温が25度の境界線が北海道や三陸海岸あたりまで上がっています。台風は、海水温が25度から27度で起こると言われています。考えてみてください。この辺は全部台風の発生域になっているのです。ですから、この辺で起こって勢力が拡大しながらこのまま来てしまいます。大きな台風がこれから頻発するのは明らかです。今年の12号台風や15号台風をその兆候と考えると、確かに日本近海で急成長したとか、1回の雨で2,400mmとか、その背景が分かってきます。昨年、高知県を訪れたときに高知市役所の人、「高知にはもう6年も台風が来ていない」と不気味がっていました。これまでのように輪を描いて、南九州、四国、紀伊半島を通るルートが非常に少なくなっている。この辺で起こって真っ直ぐ北上し、紀伊半島から関東にかけて直撃するパターンが多い感じです。

滋賀県の水害被害額は47都道府県中47位と、本当にこれまでは良かったのですが、「いつまでもこの安全が続くと思うなかれ」です。最近では「ゲリラ豪雨」と言われているように雨が非常に厳しくなる中で、本当に「命を守る」ための避難の有りようだとか、住民

の災害対応の有りようを、これから変えなければならないと感じています。

僕は「避難」を研究していますから、これまでは「逃げろ！逃げろ！」と言ってきました。けれど、本当に逃げていいのか？という状況になってきています。ちなみに2004年から2009年までに洪水災害で亡くなられた方が、どこで亡くなられているかを見ると、実に3/4は屋外で亡くなられています。適切な逃げ方ができずに命を落とされたといっても過言ではありません。例えば、2階に留まっていれば良かったのに、浸水が始まってから無理に避難したために側溝に落ちて亡くなられた例もあります。このように屋内ではなく屋外で命を落とす事例が非常に顕著に見られます。

これは平成20年の岡崎の水害です。愛知県の岡崎市は丘陵地ですから、降った雨が斜面を伝わり低いところに集まって、一気に水位を上げていきます。あっという間に車は水に浸かり胸まで水に浸かって、避難しないとイケない状況になってしまいます。このような中で、滋賀県民が水害で命を落とさないためにどう対応すべきかを皆さん自身が考えないとイケない状況になってきました。行政は避難勧告を出します。しかし避難勧告のとおり逃げても命を落とす可能性もあるのです。「避難勧告」を行政は出さざるを得ません。けれど皆さんが自分の問題として、この「避難勧告」をどう捉えたらいいのでしょうか。

例えば、ここにあるマンションの3階の人は逃げるべきではないでしょう。けれど一方で、この状態で行政は「避難勧告」を出さないわけはいきません。このような状況で「避難勧告」が出たといって皆さんは逃げますか？僕なら逃げません。しかし、「避難勧告」が出たら逃げるという完全に受け身の状態では、この中で（避難のために屋外で）動くことになるのです。「命を守る」という観点からしっかりと判断力を持たないとイケません。皆さんには、そこまで含めて防災なのだという認識を強く持っていただきたいのです。ちなみに岡崎市では夜中2時に時間雨量146.5mmの雨を記録しました。そして、2時10分に岡崎市役所は全市民37万6千人に避難勧告を出しました。だって危ないですから、これで「避難勧告」を出さなければそれはそれで問題になります。岡崎市長はわずか10分の時間で極めて迅速に全市民に避難勧告を出したのです。結局逃げたのは51人でした。だからと言って、岡崎市民の防災意識が低いと断じることは出来ません。ではいったいどうしたら良かったのでしょうか。さらに言えば、市役所自身は本当に37万6千人全員に避難所に来て欲しかったのでしょうか。住民も行政も真意はどこにあったのでしょうか。いったいそもそも「避難勧告」って何なのだろうか、こんな思いになってきます。そこで災害対策基本法第60条の避難勧告・避難指示に関する条文を確認してみると、「市町村長（首長）は、必要と認める地域の居住者、滞在者、その他の者に対し、避難のための立退きを勧告し」と書いてあります。すなわち「家から出ていけ」と言っています。これが避難勧告です。そして続けて、「及び、急を要すると認めるときは、これらの者に対し、避難の為の立退きを指示し」と書いてあります。これが避難指示です。法律上は、避難勧告も避難指示も「家から出て行け」と言っているのです。

そして第2項には「市町村長は、その立退き先を指示することができる。」と書かれています。これが体育館などの避難所にあたります。つまり岡崎市長の「避難勧告」は、法律

上の解釈では、「夜中の2時に146.5mm/hのどしゃ降りの最中、市民37万6千人全員の体育館に集合と号令をかけた」こととなります。でもそうなのでしょうか。それで命を守れるのでしょうか。どうしたらいいのでしょうか。こういう状況の中での安全の確保を考えなければなりません。考えてみてください。岡崎市は丘陵地が多く、高いところもあれば低いところもあるわけです。高いところの人は、激流の流れる道を通って避難所まで行くべきなのでしょうか。マンションの4階は浸水していませんが全市民に避難勧告が出ていますから、ここに住む人はここから降りて激流が流れるところを何とか頑張って避難所まで来ていただくこととなります。しかし、この人たちに対して市役所はそれを求めたのでしょうか。その一方で水が集まる低い場所にある木造平屋建ての人は、避難勧告が出てようが出ていまいが危ないに決まっていますから、即刻早く避難しなければならない。「避難勧告」というのは、ある一定のエリアに一律一本の情報を出し、全ての人の適正な行動を誘導しようと試みているわけですが、そんなこと出来るはずありません。考えてみてください。個人個人の家の立地場所、高いのか低いのか、家屋の構造、木造平屋建てなのか鉄筋なのか。そして例えば2階建てでも、「おばあちゃんの調子が悪いので、浸水で病院に行けないと困るから早めに逃げよう」ということまで考える必要があるかも知れません。こういう家屋の立地場所、家屋構造、家族の条件という個人個人の状態によって、最適な行動って全員違うわけです。けれども「避難勧告」はある地域に対して一律一本で情報が出され、そして全員の安全を担保しようとするわけです。出来るはずがありません。避難勧告・避難指示制度に課題があるのです。現在、中央防災会議の「避難に関する検討会」でこの議論をしています。私はいつもこの図を出しながら「一律一本で首長が逃げろと言ったから逃げないといけないとか、出ないから逃げなくてもいいとか、そういう避難勧告制度そのものが現実に対応していませんよ」と懸命に話しています。

どうしてこのような混乱が起こるのでしょうか。「避難」の概念に混濁があることもひとつの要因です。改めて「避難」って何ですか？みなさんどう考えておられますか？例えば津波が来る。命からがら逃げないといけない。これも避難ですよ。今、被災した方々は避難生活を続けていますが、あれも避難ですよ。避難にも色々あり、どうも避難の概念に混濁があるということに気づくわけです。英語では明確に分けられています。まず避難は避難でも「命からがら避難」というのが一つあります。これはevacuationといいます。命からがら避難する。津波の避難を思い出してください。まさに津波が襲ってきているときに懸命に走って逃げる。これは他人のビルであろうが電信柱であろうが何であろうが、関係ないですよ。これを英語でevacuationといいます。そして、shelteringといういい方があります。シェルターに集まってください、つまり避難所に集まってくださいという避難があります。これを「退避避難」とでも訳しましょうか。平たく言うと体育館への避難です。いわゆる「避難勧告」はこれです。今、そのままいると危ない人も出てくるから、とりあえず行政が指定する避難場所に行ってくださいねと言っている。これをshelteringと英語では概念を分けているわけです。もうひとつ言うならば、仮設住宅で避難生活を送ることは、本当は「避難」ではありません。あれは難民生活です。難民キャンプのことを

refugee camp っていうのですが、英語では refugees という言葉を使っています。「命からがら避難」、「体育館避難」、「仮設住宅避難」この 3 つを全部まとめて「避難」と日本では言っています。

命を守ることに、この中でまず大事なものは何ですか？「命からがら避難」でしょう。これがしっかり個人個人で出来るかどうかによります。個人によってみんな条件が違うけれど、行政は sheltering にあたる避難情報を出しているわけです。これでもって個人個人が最適な行動をとるには無理があります。行政では、最適な情報を個人個人、一人一人に伝えることまでは出来ませんから、相変わらず sheltering という避難に関する情報を出します。しかし個人の判断の中で行うべき evacuation が本当に命を守る。結局我々がやらなければならないのは、ここの部分をどう穴埋めするかということになってくるわけです。

先程も避難勧告制度に課題があると僕は言いましたが、今ではこれを改善すべくハザードマップにも工夫が展開され始めています。例えばこれは、東海豪雨で名前が知られた西枇杷島町で作っているハザードマップです。僕はこれを「逃げどきマップ」と言っています。西枇杷島町には3本の河川が流れておりまして、国管理の庄内川という大河川と新川、五条川という県管理の中小河川があります。どの河川が危ないかによってとるべき行動も違うわけです。今、この地図は、実は3枚あります。庄内川が危ない場合、新川が危ない場合、五条川が危ない場合の地図です。例えば、この地図は庄内川が危ない場合の地図で、木造家屋用と書いてあります。裏は鉄筋・コンクリート家屋用になっています。通常のハザードマップでは水深を示すはずですが、これは違います。木造家屋の人がどう対応行動をとるべきかによって色が変わります。ポイントはこの部分です。状況に応じて逃げるべきかの判断が明確に示されています。この木造用のフローチャートにしたがうと、この黄色の所の人であれば、まず自宅が木造家屋か、平屋建てか、2階建てかを選択します。例えば2階建てでしたら、黄色ですから「浸水前に逃げることをとりあえずお勧めしますが、家に留まってもいいですよ。」ということが読み取れます。この場合、本当であれば僕は家に留まってくださいと言いたいです。とりあえず避難した方がいいと書いてありますが、僕なら留まって家財の被害軽減をやろうと思います。なぜならば、庄内川が切れても新川を超えて向こうへ行きますから、激流が流れることはなくヒタヒタと浸水するはずですから。だから、浸水前には万が一のことを考えて逃げることをお勧めするけど、浸水後は家に留まってもいいとなっています。そして浸水後は逆に「逃げてはいけません」と言っています。「逃げてはいけません、家に留まってください」というハザードマップです。しかし、これが平屋建ての家となると浸水前に逃げるのみ、あとは考えるなということになります。

この地図を作っているのは東海豪雨の被害を受けた愛知県清須市です。あとは新潟豪雨の被災地である新潟県見附市や三条市でも作られています。実際に被害にあったところはリアリティを持って考えますから、こういう地図を受け取ってくれます。その他では札幌市でも作っています。こんな地図づくりが各地で進んでいます。これは三条市と見附市の

ガイドブックです。それぞれ形は違いますが、明確に家に留まれと言っている点では一緒です。自宅外避難の心得・通常避難の心得、逃げ方については、よくあるハザードマップに書かれていることです。ただし、同等のスペースを使って、自宅滞在の心得が書かれています。例えば、マンホール・浄化槽をどうするのか。蓋をこうやっとかといいよとか、ビール瓶のケースを逆さにして板を渡し車の前だけでも上げておくと廃車にせずに済むよとか、小技集です。家に留まった人たちがどう対応して被害軽減したかを聞き取って、そのノウハウを書き込んだ自宅滞在の心得になっています。つまり逃げないことを前提にしているのです。だからこそ僕はハザードマップではなくて「水害対応ガイドブック」と言っています。ハザードマップというと「避難地図」と訳されてしまう。しかし、洪水の時に猫も杓子も体育館に集合するなんてあり得ません。個人個人が適切な行動を取っていたできるように、その手助けになるような地図を作ろうとこんな地図にしました。逃げる一辺倒ではありません。三条市では実はこの7月にもまた豪雨があったわけですが、この三条市のガイドブックが初めて実践活用されて、なかなか評価が良かったです。もちろん7年前の教訓が生かされています。このガイドブック・逃げどきマップを使って、積極的に自宅2階に避難したことが、NHKでも放送されていました。市長は全市民に避難勧告を出しました。市長の避難勧告の中で、「2階に留まるべき人は留まってください。その判断は逃げどきマップを見てください」と言っているわけです。通常、市長が避難先を指示するのが避難勧告ですよ。体育館ではなく、自宅の2階を市長が避難所に指定したということになります。へ理屈になりますが、通常ならば避難しなかったというカテゴリーに入るものが、立派に避難したとの位置づけになるわけです。

今、滋賀県で津波の話をしていても具体的に役に立ちませんが、津波で言う3.11と同じような豪雨災害がこれからあるという感覚を僕は持っています。今回の3.11というのは、はるかに想定を超えてきました。これまでの経験の延長に描ける災害のレベルをはるかに超えたものでした。

治水についてもこれが言えると思います。これまで治水の目標を100年確率、150年確率と言ってきました。これまでの穏やかな気候のトレンドの延長に位置づけられる想定に対して防災対応を考えてきました。しかし、12号台風のように一度に2,400mmも降る雨は、この延長に描けるものではありません。これまでのトレンドの延長上に想定できないものが起こり始めているのが、最近の災害の傾向です。地震・津波で3.11があったように豪雨災害の3.11が起こる可能性が極めて高いという認識を持つ必要があります。仮に、1年にそういう災害が起こる可能性が1%であれば、30年間に起こる確率は25%ぐらいになります。これが50年間であれば50%ぐらいの確率で起こり、100年間では70~80%のオーダーで起こることになります。津波では1回起こればしばらく無いのですが、豪雨の場合は、地球温暖化の影響の中で、毎年、毎年そのリスクが続くわけですから、そのうちにひっかかります。毎年、今年も一度に2,400mmの雨が降ったわけです。こんなことが毎年どこかで起こっていて、それがそのうちに滋賀でも起こるということは残念ながらほとんど断言してもいいような状況です。今日は、そのとき、すなわち津波の3.11と同じような豪雨災

害に備え、今なすべきことを是非みなさんに考えていただきたいと思います。

このような想定を超える災害に対してどう備えるのか？という視点から津波防災教育の話をさせていただきます。津波の話ですが共通するところは多いと思います。まず、現代の日本において、今回の津波により2万人の方が亡くなりました。こんなことがあっていいのだろうか？と思うようなことが起こってしまいました。本当にむごい災害です。行方不明者がこんなに出ています。死者の中にも行方不明者が多く含まれます。海に引きずり込まれた遺体はほとんど出てきません。家族はいつまでも放置するわけにいかず、ご遺体がないまま死亡者認定をしてもらいお葬式を出します。本当にむごい。私は3月14日に現地に入りました。吹雪いている中、ガソリンもなく家族が探していました。実際お話をしたお父さんですが、娘とその日、「行ってらっしゃい」「いってきます」と別れたままで納得がいかない。お嬢さんの職場に行って「車に乗って逃げた」と聞いて、車を探したらくしゃくしゃになった軽自動車があるわけですよ。でも中にキーがついていない。それだけでお父さんは絶対逃げたくれたという確信を持って、あちらこちらの避難所を探して歩かれる。でも居ない。それでも遺体安置所に行く気にはどうしてもならないのですね。あの吹雪の中をガレキの中を歩いて探しておられる。僕を車のあるところまで連れて行き、「なあ、キーが付いてないだろう？」とおっしゃった。「そうですね、絶対逃げていますよ。」と僕も言いました。お父さんはあちこちのガレキをこうやって歩いて探しておられる。本当に、とことんむごい災害です。今回まさに想定を超えました。宮城県沖、三陸沖、福島県沖でそれぞれの想定はありましたが、これら全部を包含する形で起こってしまいました。これを以って「想定外」と世の中でよく使うわけです。この「想定外」という言葉は僕も多少違和感を持って捉えています。あとでこの言葉を観点に日本の防災を考えたいと思います。

今回そんな中で、生き延びてくれた釜石の子ども達の話をしたと思います。津波の映像をたくさんご覧になりましたよね。津波がこんな形で、まさに海からの大洪水です。水位が突然10メートルぐらい上がってなだれ込みました。津波ってこれまでは北斎の浮世絵のような大きな波をイメージしていたのですが違うでしょうか？もちろんリアス式海岸ではそのようなイメージになりますが、どちらかというとなら海からの大洪水です。ただ川からの大洪水と違うのは、川では水の供給源が所詮川からですから、洪水も有限で川幅より広く堤防が切れることもあまりないわけです。ピンポイントから水が出ますから、有限の水が拡散して徐々に水位が上がってくるというのが川の洪水です。

ところが海からの大洪水となると、突然10メートルぐらいになって、この水が無尽蔵です。この高さよりも低いところは徹底的に全て水で埋め尽くすまで容赦せず、内陸10kmでも20kmでもこの高さのまま突っ走っていくわけです。この家は突然水深10メートルの川底に家に移されたようなイメージです。破壊力だけでもすごいものです。

津波は低いところから流れ込んできますから、先に川を遡上していきます。正面からくる津波と川を先走りして後ろから溢れて攻めてくる水とに挟まれ、行き場所を無くして亡くなったという話がいっぱいあります。

とんでもない津波でしたが、そこで色々話を聞くとまさに九死に一生を得るという話ばかりでした。ここで防災の議論をやる時に、是非頭に置いておいていただきたいことがあります。我々が被災地に行ってお会いするのは亡くなった方ではないということです。当たり前ですが、生き残った方からしか話を聞いていません。生き残った人が目の前にいるから、生き残った人の対応をすることをもって防災だと考えてしまいがちになります。この観点はひとつ言っておきたいと思います。まさに九死に一生を得ると言いますが、この車の上の人を見てください。この3時31分14秒に車の上に乗って流されています。12秒前にはこの隅ですから、12秒でここまで流れています。この人は幸せです。津波はここで引き潮に転じて車が一瞬平らになったときに、目の前に屋根があったのです。僕はこの人に会って話を聞きましたから、「本当によく生き延びたね」という話ばかりになるわけです。生き残った人からの話を聞くからです。でもこれはまさに「九死に一生」です。大半の人が「九死」です。例えば、ここに人の影が映っています。家と車の間に人影があります。ご覧いただけるでしょうか？こういう人達は「九死」でした。そして僕らはこの人達から話を聞くことは出来ません。目の前にいて話を聞けるのは生き残った人です。だから「本当によく生き残ったね」という話ばかりになるのです。

ここで防災について一言、最初に申し上げたいことがあります。「防災は生き残った人のためではなく、一義的には人が死なないためにやる」ということです。今日の演題に「命を守る防災」と敢えて書いたのは、僕は阪神淡路大震災以降の日本の防災に異論がありません。阪神淡路大震災以降の日本の防災は、本当に良くなりました。例えば被災者生活再建支援法では、公的なお金を個人の資産の目減りに対して補填します。このようなことが出来るのは日本だけです。僕はこれに反対ではありません。「日本社会よくぞそこまでやって被災者を救ってくれた」と、その合意の仕方に対して日本らしさを感じ、僕は日本って温かいと思うのです。そして阪神淡路大震災のあった1995年はボランティア元年ともいわれています。被災地をみんなで助けることが出来るようになったのが日本の防災です。三陸地域に行ってみてください。どれだけのボランティアが入り、どれだけのお金が入り、いろんな役所が支援をし、日本国民あげてあの被災地を助けようとしている。本当にこんなことが出来るようになったのは阪神淡路大震災以降です。良くなったということはそういうことです。それでも僕は文句を言いたい。何を言いたいかということ、それは全部生き残った人の為の防災だということです。被災地に行ってみてください。目の前にいるのは、生き残って今を苦しんでいる多くの人たちです。けれど本当に一番無念な思いをしているのは、亡くなった2万人の方なのです。2万人の方に僕らは話を聞くことが出来ない。現場に入ると、警察、消防、自衛隊が遺体を処理してくださっています。僕らの目の前にいるのは、生き残って今を苦しんでいる人たちです。そして、当然人間の心情としてその方々を精一杯お助けします。そしていつしか弔いの心まで満たしてしまいます。

防災のファーストプライオリティって何ですか？人が死なないことです。セカンドプライオリティは何ですか？生き残った人たちをみんなで支援して立ち上げていくことです。サードプライオリティは何ですか？やっとならで出てくるのが、例えば帰宅困難者問題で

す。この問題は防災の問題ではありません。帰宅困難者問題は、生き残った人が帰れないと言う問題です。やろうと思えば3日で解決する問題です。日本の防災はセカンドプライオリティばかり出し、ファーストプライオリティを見ずに、サードプライオリティをやろうとしている。ただし、帰宅困難者問題は防災ではありません。これは通常の都市交通問題の災害時対応の問題であって、防災の問題ではありません。防災は人が死なないことに対してもっと力を注ぐべきです。阪神淡路大震災以降、僕らは亡くなった6,400人の声を聞いてないのではないか。もちろん生き残った人からしか声を聞けません。だからやられた地域を立ち上げる防災ばかりが進んだのですが、それに対する違和感を僕は持っています。例えば、防災が功を奏して一人も死ななかった場合はどうなるでしょうか。生きていて当たり前だから何の議論も起こらない。一生懸命防災をやって、ここの10人みんな生き残った。そして経済被害だけが残っている。「おいおい困ったな、偉いことになったな」と言って幸いなことに10人で議論するわけです。マイナスになった経済被害のことばかり気になり、これをどうやって元に戻していくかということを防災と考えるわけです。違うでしょう。防災をやっていたから10人生き残れたのです。本当は何人も死んでいたかもしれないのに、10人生き残れたことをまずは喜ぶべきです。命の防災は満点が0点なのです。自分が生き残ったことを前提で話すから満点が0点です。釜石が今回脚光を浴びたのは0点ですが周りのマイナスが大きすぎるからです。防災の根源は人が死なないことです。これは声を大にして言いたいと思います。

これだけの状況があって、この災害は「想定外」というキーワードで括られました。この辺りから日本の防災に対する認識不足、もしくは僕が考える日本の防災の誤りを指摘してみたいと思います。今回「想定外」という言葉が新聞やマスコミで躍りました。僕はこの「想定外」という言葉には、どこかに「想定外だから仕方がない」と言わんばかりで気にくわないのです。でも敢えてこの言葉を取り上げます。想定外、想定外って言うのなら、本当に想定外だったのか？想定外って言うなら、では想定とは何だったのか？こう考えます。想定には2つあります。1つは、何を想定して想定外というのか？自然を相手に想定を考えます。自然に対しては“どんなことでもあり得る”と考えるのが普通です。例えば、この平野は何が作りましたか？川が作りました。氾濫原といいます。学校で習いましたね。川が大氾濫して平野をつくる。武蔵野の大地は富士山の火山灰のあとです。新幹線の新横浜駅で止まったら周りを見てみてください。崖だらけです。あれは富士山の火砕流の跡です。こういうレベルで考えるならば、今回の津波も当たり前のようにあるものなのです。1946年のアリューシャンの津波は映像に残っていますが、津波がスクリーンのように映っています。これは灯台です。それから日本で最大とされる明和の津波は、石垣島で遡上高85メートルと言われています。そんなレベルで言うなら自然はどんなことでもありえます。ただどこで問題になるのは、そんな巨大な災害を防災の枠組みに持ち込んだときに、どういう結論が出るのでしょうか。たちどころに結論が出ます。諦める。例えば巨大隕石が地球に向かって飛んでくるとします。今、我々に何が救えますか？すっかり諦めて今から最後の大パーティを開くかも知れません。にこやかにその時を迎えましょう。それしか言

いようがないわけです。無尽蔵に巨大な災害から現実問題として守るというレベルでは、議論しても仕方がない領域が必ずあります。であるがゆえに、防災というのは必ずそこに防御の目標を定めるのです。「これぐらいまで守ろう」ということです。言葉を返すなら、初めからそれ以上のものは守ろうとしていないということです。防御の目標を定める。ここで問題が生じます。日本って災害大国でしょう。考えてみてください。先程のこの図を見てもそうなのですが、日本は、ヨーロッパ、アメリカ、フィリピン、太平洋からの4枚のプレートの繋ぎ目にあります。こんな不幸な場所にあるのです。ですから、火山もいっぱい、地震もいっぱい、津波もいっぱい、そして台風までくる災害大国です。災害大国という言葉はよく聞かれていると思いますが、こんな国は先進国では日本だけです。ヨーロッパは災害が無いし、アメリカはあるけれど国土が広いから本当に危ないところには人は住まない。日本はこんな狭いところにあらゆる巨大災害がギュッとあつて、ここに一億を超す人間が住んでいます。であるがゆえに、人為的に安全をつくって暮らしているのです。聞き慣れない言葉かもしれませんが、日本は防災大国です。積み上げた人為的な安全の中に社会を形成しているのが日本です。この防災の目標レベルが極めて高いわけです。例えば治水で言うならば100年確率というのがよく言われる言葉です。100年確率を土木屋がどう考えているか。先進国たるもの、一人の一生の間に一回あるか無いかというレベルで考えています。けれど、感覚的な側面で考えてみてください。100年確率を世代でいうと4世代になります。結婚して第一子が生まれるのが25歳だと考えてみてください。4世代でしょ？そうすると、100年確率というのは自分を中心に親父、じいちゃん、ひいじいちゃん、これで4代です。いかに災害に遭わないかということです。日本は災害大国で自然災害のリスクが極めて高い国ですが、極めて高いレベルの防災をやることで、なんとか社会が成り立つレベルの安全を確保し無理に住んでいます。でもこの100年確率は感覚的にはとてつもなく高いレベルで、もう無いとさえ思い始める。そして、自然を制圧したかのごとく、そして自然に対する畏敬の念を忘れ、その高い安全をくれるのは行政だと考えるようにどんどんどんどんなっていく。“100年”という数字は魔物です。自然との隔世の感を持ち始める。完全にコントロールされた安全の中に我々は暮らしていると誤解を招き始めている。でもやっぱり100年確率という一定のレベルまでしか守ってないが故に、それを超えてくると無防備な住民に、大きな災害がドカンと襲いかかって、まとまってごそつとひとが死んでいく。これが日本の災害の形です。だから一度起こると多くの方々が亡くなってしまうわけです。

実態を見てみましょう。治水の目標は100年確率です。頻繁に雨が降るから、100年確率を定義出来るわけです。でも津波はそうそう無いものですから、確かな記録に残る過去最大級の津波を目標にという話になります。三陸地域では明治三陸津波、昭和三陸津波あたりが想定外力とされています。明治三陸津波は明治29年に発生し、当時の人口3千万か4千万かという人口の時代に、2万2千人の命を奪いました。僕の通っていた釜石は、人口6千4百人のうちの4千人が亡くなっています。人口の2/3が亡くなりました。田老町は、今は宮古市田老ですが、村人1,859人がほぼ全滅し生き残った人は36名で、沖合に出ている

た漁師のみでした。東北地方はこれほどの津波による災害を経験しているから、これを想定外力にして（豪雨災害で言うなら 100 年確率のような想定外力にして）、防災をやってきたわけです。とてつもないレベルの防災です。例えば田老の万里の長城、この堤防です。この家からは見上げるような堤防です。幅といい高さといいとてつもない堤防です。4 年前にこの辺りのおばあちゃんと話をしました。「おばあちゃん、このあたりは津波が来ると言うけれど、来たら逃げられる？」って聞くと「ここは明治の津波も昭和の津波も難儀したところで、でも今は有り難いことに立派な堤防を造ってもらってなあ。」と仰いました。「おばあちゃんだめです。この堤防は高さが 10 ㍎しかありません。昭和三陸津波は 10 ㍎でしたが明治三陸津波は 15 ㍎来ています。おばあちゃん逃げないとだめですよ。」って言ったら、「いや、ありがと。でもなあ、ここに上がってみ、もう一本向こうにあるぞ。こんなん 2 つも越えて来る時には、じいちゃんが迎えに来たときやから。」と言われた時には困ったなと思いました。「でもおばあちゃん、これは 10 ㍎ですからね、15 ㍎来たら何本あったって駄目ですから逃げてね。」と言ってその場を離れました。この堤防が出来てから、田老の人は避難訓練に参加しなくなっていました。そんな話がもう 1 つあります。釜石湾の入口に湾口防波堤が出来ました。水深 63 ㍎から堤防を立ち上げました。考えられないでしょう？その上に海底から 70 ㍎の高さの堤防が湾口を塞ぐように造られました。世界最大でギネスブックにも載っています。30 年間だけで釜石市民一人当たり 300 万円以上、一家 4 人で 1,200 万円以上のお金を入れて大堤防を造ったのです。釜石は 6 千 5 百人のうち 4 千人が亡くなられています。ここは昭和三陸津波とかチリ津波とか、常襲地域ですから、ここに住むのであればある程度の防災をという中で、ハード事業を先行させていった事情はよく分かります。だけど、ここでこういう問題がありました。先程の田老ではおばあちゃんが逃げそうにないという話をしましたが、この堤防が出来上がったのは確か 2008 年か 2009 年のことで、僕は呼ばれて防災講演会をしました。会場を出たところでおじいちゃんに呼び止められ、「先生は群馬の山の中から出てきて、津波が危ない、津波が危ないって言うけど、いいかげんにその話はもうやめて欲しい。」と仰いました。「どうしてですか？」って聞くと、「釜石の人は、明治も昭和もチリ津波も毎回毎回津波で苦勞してきて、どきどきひやひやしなながらここで生きてきた。こんな所に住んで良いのかと思ひながら住んでいて、やっと世界一の堤防を造ってもらって、これでやっと心穏やかに住めるようになったと思っていた。今日はいつもと違ってどんな話をするのかと思ひて聞きに来たのに 8 割一緒やないか。あんたいつまでそんな話するんや」と仰るものですから、僕は「立派な堤防が出来ましたが、これは明治三陸津波を対象にして造ったものですよ。おじいちゃん、これが出来たから安心と思ひたいのでしょうか？僕はその「心」が危ないとお話したのです。」と言いました。しかし、「俺らは、世界一の堤防を造ってもらっても、釜石に住む限りずっとひやひやしなながらしか生きていかんのか？こんな立派な堤防を造ってもらって、俺はやっとこれで安心して穏やかに住もうと思ひているのに、お前は津波が怖い、津波が怖い、ってもうええかげんにしてくれ。人の幸せをどう考えとるんや。」と言われました。これは本質的な問題を僕らに投げかけています。怯えながら生きることが得策なのか。でも、適

切な対応をしながら生きるという自然との向かい合いから、あるレベルまで人為的に守ってもらったら、これを僕らはどのように理解し、それをどのように生活の中で位置づけていくのか、どのように生きるということに位置づけていくのか。この本質的な問題を投げかけられていると僕は思いました。未だにこれに対する回答は出ていません。ただこの釜石の湾口防波堤を見てください。この堤防が出来たお陰で、津波の到達が6分遅れたと言われています。そして津波の高さも4割から5割軽減されたと言います。これによって守られた命は膨大です。しかし、この堤防が出来たからと言って逃げずに亡くなった命も膨大にあります。堤防が出来てその分が守られるのは当然として、堤防が出来て命を落としたということに対して僕は問題視するのです。堤防が出来たからといって逃げずに死んでしまったのです。田老の人もそうです。この問題をどう考えるのか。田老の防波堤は結局どうなったのか。高さ10mの堤防に対して18mから24mの津波が来てズタズタです。釜石の湾口防波堤もズタズタです。

そして、「想定を超えたから、想定が甘かったから、想定を見直そう」という議論になりました。つまり、不十分だったから堤防をもう少し高くしよう、ということになったのです。これでいいのでしょうか？こういう議論をしているからいつまでたっても日本の防災は良くならないのではないのでしょうか。常にあぐらをかいて人為的に作り上げる安全の上でしか生きようとしなないこの姿勢です。自然に対する畏敬の念も忘れ、自然を制圧し、制圧した自然の上にとどこまでもあぐらをかいて生きていく。これで造った堤防がこれより大きい津波にやられたら、また高さが足りないと言う。この延長にあるのは日本の沿岸部を全部40m 50mのコンクリートの壁で囲むような議論です。そんな馬鹿な話があるのでしょうか。僕は堤防を造ることに反対してはおりません。堤防をつくれれば物理的な安全は高まります。だからその面において堤防を造ることが悪いとは全然思わない。でも僕が不満なのは何かというと、釜石のじいちゃんや田老のばあちゃんのように、堤防を高くすることで人間の脆弱性が高まっていくことです。それを議論せずして一方的に自然を制圧しようとする議論しかやらないことに対して僕には不満があります。堤防を高くすることによって出来上がる人間側の脆弱性を補いながら、その両輪でやっていかないと本当に防災は良くならないはずなのに、いつまでも自然を制圧する議論しかしない。ここに僕は歪さを感じるわけです。そしてやっぱりそうでした。新聞に出ていました。田老の防波堤です。「日本一の防潮堤、万里の長城。住民たちはそう呼んで信頼を寄せていた。防潮堤は安心の拠り所だった。防潮堤があるからと逃げ遅れた人が多かった。」このように、堤防を高くしろの一辺倒です。

防御のレベルを上げると、人間は当然依存度を高めます。つまり人為的に作り上げる安全は、human factor の脆弱性を高めてしまうのです。過保護な親のもとに、ひ弱な子供が育つのも同じことです。100年確率で治水をしますと、取り払われるのはほとんど全ての洪水です。100年確率のレベルでやればずっと安全な滋賀県が続きます。でも100年確率の堤防で防いでいるのは、100年確率以下のチマチマ水害です。しかし頻度は大半です。ほとんど全てのチマチマ水害を全部取り払ってもらって、我々は嘉田知事が仰るように、水害

被害額が全国 47 番目の一番安全な状態を享受してきたわけです。100 年確率の治水がもたらしたものは、安全と同時に皆さんの無防備さです。これがない時代には、チマチマ水害が頻繁にあった。だから、「浸かるときはいつもあそこから浸かるぞ」、「ここに家を建てるもんじゃない」という災いをやり過ごす知恵をみんなが持っていました。今はそれが全部無くなってしまい、継承する動機付けもない。「ひいじいちゃんの時代にあつたらしいぞ。」というはるか遠い昔の話になってしまうわけです。昔、チマチマ水害がよくあった時代には、みんなで土嚢を積んで水防活動をしていました。地域の若い衆が躍起になって地域を守ろうとする地域のコミュニティがありました。共同体組織もありました。今はそういうものがほとんど無くなった。災いをやり過ごす知恵を無くし、共同体意識を無くし、コミュニティを無くし、そして無防備になったところに襲いかかろうとするのが、100 年確率を超える大きな災害です。無防備な住民に襲いかかるのは大きな災害という構図をつくった。当然なのですが、まとめて命が失われます。無防備で対応する術を知らない住民に大きな災害のみが襲いかかるという危険に置かれている。ある意味堤防が高ければ高いほど脆弱性が高まっていく。今回の災害は想定外でしたか？いえ、自然の営みとして想定の内です。あの津波に対する想定が甘かったのでしょうか？ギネスブックの記録を見て、想定が甘かったと議論するのでしょうか？こんなことを言っているはいけません。では、何が悪かったのでしょうか？それは「想定にとられすぎた防災」です。これが僕の 1 つの結論です。高いレベルの堤防が出来たからもう大丈夫と、日本の高いレベルの想定に身を委ねていった。そしてもう大丈夫と思ってしまった。その中で多くの人々が亡くなっていったのが今回です。「想定にとられすぎた防災」ということでしょう。

ここまでハードの話をしてきましたが、ソフトも全く一緒です。これは釜石のハザードマップです。ここからは人間の性が浮き彫りになるような話になります。本当に考えさせられます。これは津波のハザードマップです。釜石は明治三陸津波を対象にハザードマップを作っています。この赤いラインがその昔、明治三陸津波が来たラインです。そして今、もう一回明治三陸津波が来た場合に予想されるラインがこの色の付いたところです。堤防が出来たおかげで浸水範囲は小さくなっています。今、このハザードマップを皆さんが釜石市民に成り代わってハザードマップを受け取ったとしてみてください。至極当然自分の家を探すでしょう？そして色が着いていない場所に自分の家を見つけたとすれば良かった！と思うでしょう。そして万が一この赤い所に家を見つければ困ってしまいませんか。これが普通の見方です。そういう見方をしている人々に襲いかかった津波はこんな津波でした。全部を飲み込んでしまう津波でした。そして問題はここからです。僕は釜石市の危機管理アドバイザーで、直後に現地に入ってしばらく市長の横にいて、警察から上がってくるデータを見ながら住所を地図にプロットしていきました。データが溜まって来たときに、なんだ？と思うような 1 本の線が出てきました。慌ててハザードマップと重ねてみますと、驚きました。ご覧下さい。なんとなくこの辺にラインがあるのでハザードマップと重ねてみたら、残酷なことにハザードマップで示す浸水範囲の外側で人が亡くなっていました。予想浸水範囲内の人は危ないと言われていたので逃げていたのです。この外側の人

が「良かった、大丈夫だ」とたかをくくって亡くなられてしまいました。白地だったらうれしいと普通の感覚で捉えている。だけど、あくまでこれは明治三陸津波がもう一度あったらという想定のもとに作られている。ハザードマップは明治三陸津波がもう一度来たらという想定を描いたもので、そしてその想定にとらわれすぎて多くの人々が亡くなられていったのです。一体どういうことなのでしょう。そもそもハザードマップは何の為に作ったのか？ 田老に作られた堤防は人を逃がさないようにする為につくったのでしょうか。釜石の湾口防波堤でも同様のことが起こって人が死んでいる。ハザードマップを出したら、危険ラインから外側の人々が死んでいる。なにが問題なのでしょう。共通の問題があります。ここが防災の根源的な問題です。日本は災害大国です。時に大きい災害があるわけです。だけど防災のレベルは防災大国であるがゆえに、100年確率といった高レベルで防いでいますから、畏敬の念を忘れてしまうというか、あたかも自然を制圧したかごとく、災害なんてもう無いというような感覚になってしまうのです。高い安全を作ってくれたのは行政で、その行政に命をゆだね、自分の命を守ることに對する主体性を欠落させる。脆弱性ばかりが際立ってくるのです。

これは、ハードも重要だけどソフトも重要でそれに対応した人間であれということを示唆しています。そこまで含めて対応力をつけないと守りきれない部分が出てくるのです。この原点に帰ることが重要です。これを子供達に教えないといけない。小学1年生の子どもに向かって、大いなる自然の営みに畏敬の念を持ってなんて言うのは、いきなりアウトですね。どうにもならないですね。そこで僕は、これを咀嚼して三原則という形で子ども達に教えました。ただ考えてみてください。日本の子どもに、自分の子ども、孫を思い出して目の前に置いて「自分の命は自分で守れ」と言うときの白々しさを。分かりますか？ 日本は世界で一番安全で平和だと言われている国です。最近でこそ殺人事件など新聞で出ますが、微々たる数です。世界で一番安全な国でこれまで生きて子ども達は、高々10数年の人生において、誰かに自らの命を殺められそうになったことなど無いはずですが。家庭では親に守られ、学校では先生に守られ、地域に守られ、自分の命が何かに奪われるなんて考えが浮かぶはずがありません。そのような子どもに「自分の命は自分で守れ」なんて言う言葉は、たぶんテレビゲームの感覚でしかないのではないかと思うのです。親も逃げないのに、そういう子どもに「自分の命は自分で守れ」と教えなければならないのです。子ども達に教える難しさを非常に感じました。でも教えなければならない。子ども達がきちんと逃げる社会をつくる難しさを今、少しお話ししました。3・11の前には、避難勧告が出ても逃げない、津波警報が出ても逃げない大人たちでした。であるのに、子どもに「逃げろ」と教えるのです。子どもは大人の背中を見て生きています。そうやって社会の状況の中で常識を築いていきます。子どもがこんな子どもであるのは誰の責任ですか？ 大人が自ら津波警報を無視して逃げないのは大人の責任です。大人は自分の選択による結果ですから自由です。でも子どもはその姿を見ながら大人になっていくのです。子どもが命を守り抜けないのは、そんな背中を見せた大人の責任です。そんなことを含めてわかりやすく伝えなければなりません。日本でこれを教えるのは難しいのです。アメリカの友人は、子

どもの頃学校で、「街に行ったら人が一人倒れていたら助けてあげなさい。二人倒れていたら注意なさい。3人倒れていたら即座に逃げなさい。」と教わっています。日本の子どもはこの意味がわかるでしょうか。こんな現状の中で子ども達に「逃げること」を教えるため、僕は津波三原則をつくったわけです。

三原則を説明する前に全貌から話をさせてください。今回釜石の子ども達は、小学生1,927人、中学生999人。14校の学校で3,000人の子ども達が自らの命を守り抜いてくれました。子ども達は自分の命を守っただけでも立派で、本当に褒めてやりたい。さらに、うれしく思っていることがあります。子ども達は逃げながら、保育園に駆け寄って保育園の子ども達を抱きかかえて逃げているのです。最初に避難した避難場所である老人福祉施設の入居者の車いすを押して逃げているのです。自分の命を守り抜いただけでなく、本当に多くの命を守ってくれました。それだけではありません。普段から子どもたちは家庭で一生懸命お母さんに、「今日はこんな避難訓練したんだよ。こんな時はここに逃げるんだよ」と話をしていました。僕が言ったことを子どもたちは実践してくれていました。僕は親に一生懸命アピールするよう言い聞かせました。なぜなら、自分の子どもがちゃんと逃げるという確信を持てば、お母さん自身も逃げてくれると考えたからです。子ども達は自分たちがあやふやだったら、お母さんは自分たちを迎えに来ると思っています。そうするとお母さんが死んでしまうと思っているのです。だから子どもたちは、「僕は絶対に逃げる」という確信をお母さんに持たせるまで一生懸命話をします。今回釜石に行きますと、たくさん親から声をかけられます。その時に親に聞くのです。「お母さん、逃げました？」「逃げましたよ。うちの子なんて逃げるなって言っても逃げますから。」この言葉の陰で守られた親の命がどれだけあったことでしょうか。子ども達はそれを考えていました。「津波てんでんこ」という言い伝えがあります。てんでんこに逃げられる環境をつくるためには、迎えに来なくても大丈夫だとお母さんに信じてもらえないとダメです。めちゃくちゃ偉い子たちですよ。この釜石の子ども達のことを新聞は「釜石の奇跡」と書いてありましたが、僕はこの言葉に違和感を持っています。それにはいくつかの理由があります。釜石はそう褒められた状況ではありません。僕には釜石に津波が来ることは分かっていました。だからなんとか犠牲者をゼロにしようと通っていました。でも、毎回毎回、防災講演会をやっても来る人は同じ人ばかり。たぶん今日もそうでしょう。このままお帰りになってもいいような方ばかりです。問題なのはコミュニケーションチャンネルがないことです。本当にお伝えしたい人には伝えようがないのです。それで、僕は学校教育に入りました。10年たつと子どもは大人になります。僕は学校教育に入ることで真つ当な次の世代を育てられると考えたのです。教育の継続は文化の醸成です。しかし、このときはまだ子ども達の防災教育を地域に広げきるに至ってはいなかった。その結果、1,100人亡くなりました。防災のプロジェクトとしては失敗です。ただ子ども達の多くは生き残ってくれました。しかし実は5人の子どもが命を落としています。この子ども達を守ってあげられず本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。そんなこともあって僕は「釜石の奇跡」という言葉に違和感を持っているのです。

その5人の子ども達のことをお伝えしたいと思います。まず2人は学校を休んでいました。子どもの命を守るのは学校防災教育と考えがちですが違います。1年365日のうち、春休み夏休み冬休み土日も入れたら、子どもが学校に行くのは200日です。1日24時間のうち、子どもが学校にいるのは6時間~8時間です。一日の1/4~1/3です。200日の1/4だと50日です。したがって、子どもが学校において被災する可能性は50/365です。残りは全部家庭なり地域です。そう考えると学校防災教育も大事ですが、地域や家庭における防災の重要性もよく分かります。この2人は学校を休んでいて被災しました。3人目の子は避難の途中に親御さんが迎えに来て一緒に亡くなりました。災害の進展過程で親が迎えに来たのです。親にしてみれば自分の子どもですから、守る権利があると言うかもしれませんがこれはエゴです。考えてみてください。30人の子ども、一人を受け渡すのに要する時間は、残り29人の子どもの命を守る時間を削ることになるのです。30人全員だったら間に合わないでしょう。誰が責任持つとかそういう話ではありません。子どもの命を守ることにしてもっとも効率的なことは、学校にいる間の子どもの安全を先生方をお願いすることなのです。親が来ると効率的な避難を乱してしまいます。4人目の子は家庭の事情でお父さんと暮らしていて、お母さんが離れた所で住んでいる家庭でした。中学生の準備の為に母さんが久しぶりに来て買い物に行くということで学校を早退していました。そしてお母さんと共に亡くなりました。5人目の子については自責の念を感じています。僕は、中学生は守られる立場でなく守る立場であると教えていました。釜石は田舎ですから、ご両親が仕事に行き、地域に残るのはお年寄り子どもばかりです。この子はお年寄りを守ろうとして亡くなっていました。家に帰っていて大きな地震があって、裏の家の一人暮らしのおばあちゃんの避難準備を手伝っていた時に大きな余震があり、タンスが倒れてきて亡くなりました。まさしく守られる立場ではなく守る立場だということを実践して、僕の教えを守ってくれました。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。この子に対して僕の心の整理はついていません。ただ、間違っていたのかというと、それも言えません。中学生たちはどれだけ弱者の命を守ってくれたのか。保育園の子どもを抱き抱え、おじいちゃん、おばあちゃんの車いすを押して逃げてくれた。中学生たちが守ってくれた命は膨大にあります。でも多くの子どもたちの中で一人、このような子が出ってしまったということに対して、僕はどのように捉えればいいのか、僕の心の中で十分な整理が出来てないというのが正直なところです。このようなこの5人の子ども達のことをこれからも忘れずに防災を考えていきたいと思っています。それであっても僕は子ども達を褒めてあげたいと思っています。

僕は最初に、この子ども達に「想定にとらわれるな!」・「ハザードマップを信じるな!」と言いながら、まさしくこのハザードマップを子ども達に見せました。子ども達は大騒ぎです。「オレの家セーフ、おまえの家アウト!」しばらく騒いだ後に子ども達に「きみの家本当にセーフなの?」問いかけると、「だって色がついていない」とシンプルな返事が返ってきます。「色がついていないけどさ、この色がどうやってついたの?明治三陸津波がもう一回あったらって言ったよな。この次の津波は明治三陸津波なのか?それより大きいかも

しれないし、小さいかもしれないし分からないじゃないか？」と僕は応えます。すると子ども達は「そうか」と明確に分かるんです。「学校だって危ないかも知れないよね。ハザードマップも近くだし、川も近くにあるし津波が少し大きかったら学校も危ないよね」と子ども達が言ったときに、僕は彼らが理解したと実感して「そうだよな」と言います。これが後から大きな意味を持つことになります。これは子どもだから本当に理解をしたと僕は思うのです。大人は多分だめです。今は皆さんなるほどと思うかも知れませんが、明日の朝になるとやっぱり自分の家は白いと思うのです。大人の中で一度出来上がった既成概念はなかなか壊せません。でも子どもはちゃんと理解します。実感としてわかりました。

三原則の1つ目は「想定にとられるな！（津波避難三原則その一）」です。想定は人間が決めたことで、自然がその通りに動いてくれるはずがありません。これを見て、安心して人が死ぬことがあるのです。100年確率がどうした？ということです。それを150年にしたからどうだと言うのです？関係ありません。「相手は自然で、如何様なこともあり得るから、いかなる状況においても君が出来ることは、その時その時、自らが出来るベストを尽くす、以上だ。」「グラグラッと揺れた時にどんな津波がくるかなんて誰も分からない。その時に君はそんなこと関係なく今出来るベストを尽くす、それだけだ。」これが三原則の二つ目の「最善を尽くせ（津波三原則その二）」です。そして僕は厳しいことも言いました。「君のベストの対応力よりももっと津波の力の方が大きければ君は死ぬことになる。それも自然の死に方の一つだ」と言って、僕は先生に怒られました。「子ども達に地図を配って置いて、地図を信じるなど言ったでしょう。」「だったらそんな資料を配らなければいいでしょう」と言われました。日本の学校教育では、先生の言うことは全て“正しい”ことです。教科書に書いてあることは全て正しくて活字になった途端にそのまま真実になってしまう。このような知識獲得型が日本の教育です。これはある意味で弊害ですよ。『防災を考える場合にはそんなのでは駄目ですよ』と先生とかなりやり合いました。まだあります。学校では子ども達を励ましています。「学校では頑張れば出来るようになると励ましているのに、片田先生は頑張らなさい、でも死んでしまうかもしれませんと言う。そんなことを言っただけは、身も蓋もないではないですか？」と言われます。でも、僕はこの二つは自然に向かい合う姿勢として、間違っているとは思っていません。そして子ども達に教えたことが、子ども達の行動によってこれで良かったと僕に確信を持たせてくれました。その子ども達の行動を紹介します。この釜石東中学校と鶴住居小学校は並んでいるので日頃から合同で避難訓練をすることが多いのです。この日、中学校ではめちゃくちゃな揺れが5分6分続きました。教頭先生が這うようにして放送室に行き、落ちていたハンドマイクで、子ども達に「逃げろ」と言おうと思いきや立ち上がった時には、既に子ども達は走り始めていたそうです。最初に動き出したのはサッカー部の子ども達でした。彼らはクラブ活動中でしたが、揺れで立ってられなくて四つんばいになっていたところに、脇を地割れが走ったのです。すぐに中学校の校舎に向かって「津波がくるぞ！逃げろぞ！」って声を上げてそのままサッカー部の子ども達は走り始めて、小学校の校舎に向かって「津波がくるぞ！逃げろぞ！」とって御在所の里に逃げて行きました。中学生が次から次へとそれに続いた

のです。小学校はつい最近耐震補強をしたばかりでハザードマップの外でした。鉄筋コンクリートの3階建てで、普通なら避難所に指定されます。当日雪が降っていたので、先生が子ども達を3階に誘導していました。しかし顔見知りの中学生のお兄ちゃんお姉ちゃん達が「津波が来るぞ！逃げるぞ！」と言って全速力で走って行くのです。先生が「上がりなさい！」と言うそばから、後ろの子ども達が中学生について行く形になって、御在所の里に向かってみんなで逃げたのです。この近所のお年寄り、釜石の中学生が日頃、足腰の悪いお年寄りをリヤカーで運ぶ練習をしていたので信頼も厚いですし、津波に一番詳しいのは中学生なので、その中学生が懸命に走る姿をみて、お年寄りも巻き込まれるようにして逃げ始めました。そして保育園はお昼寝の時間でした。保育士さんは子ども達の服を着替えさせ、すぐに逃げられる準備をしながらも、ハザードマップからかなり距離があったので躊躇していました。しかし、中学生、小学生が懸命に走ってくるので、小さい子どもはおんぶして大型のベビーカーに子どもを乗せられるだけ乗せて、坂道を上って行ったのです。そうしたらそれを見つけた中学生が駆け寄って行って一人一人抱っこして、残っている子どもを保育園から連れ出して、お年寄りと一緒に御在所の里に逃げこみました。御在所の里がここです。最終的にここまで津波がきましたが、子ども達が逃げ込んだ時にはまだ来ておらず、ここに600人の小中学生、保育園児、お年寄りまで、いっぱい入っていました。その時に崖が崩れかけたのを子どもが見つくて、「先生、崖が崩れかけている。ここじゃだめだ。先生、山崎に行こう。」と言いました。山崎というのは御在所の里の上にある山崎デイサービスセンターのことです。津波がここで止まっているように、擁壁で一段高くなっています。ここに行けばもっと安全だって気持ちがあるわけです。だから「先生、ここじゃだめだ。山崎に行こう！」という声が子どもから上がったのです。

この岸壁に津波がバーンと当たり水しぶきが10メートルも20メートルも上がって、津波が流れ込んで来ると、家々を壊して土埃をあげている。それを見つけて、小学生が「うちにじいちゃんがいる！じいちゃん逃げてない！」って言いながら、子ども達が家族の心配をして泣き始めて、現場は騒然となり始めました。中学生が「やっぱり山崎に行こう！」と言って、この御在所の里から、擁壁があって一段高くなっている山崎まで逃げたのです。その時の写真が残っておりまして、赤白帽をかぶった小学生の脇には中学生がいて手を繋いでついてあげて、子ども達を励ましながら逃げていくわけです。津波がすぐ後ろまで来ているわけですよ。音がするからみんな気がかりで後ろを見ながらの道のりです。この後ろにはさらにお年寄りが連なり、そしてその後ろには中学生の女の子達が保育園の子ども達を抱っこしながら。その後ろには男の子達が、御在所の里の入居者の車いすを押して、みんなで懸命に走って、逃げ込んだのがこの山崎デイサービスセンターです。この裏は擁壁になっています。そこから撮った写真がこれです。瓦礫だらけですね。子ども達がここへ逃げ込んだわずか30秒後のことです。津波がここまで来て、瓦礫が軋む音を立てながらぎりぎりのところで渦を巻いているこんな状態です。わずか30秒のことで子ども達は保育園、お年寄りを連れて逃げ込んで命を守り抜いたのです。

子ども達の写真が残っています。ここまで津波が来ています。前にいる小学生が心配そ

うに見ています。中学生の横に見えるモヤモヤとしたのが家々を壊していく時の土煙で、次の瞬間、津波がさらに入ってきて子ども達が懸命に逃げ始めます。ここまで逃げてきたのにまだ津波がくる。子ども達のここまでの動きをおさらいしてみると、最初はこの御在所の里にいて、「先生、ここじゃ駄目だ！」と行ってここまで逃げて、今の写真があります。一部の子どもは小学生の手を引いてこの山を駆け上がりました。道無き道を上って行ったのです。でも何人か上がった後に残るのはお年寄りと小さな子どもばかりです。残った子ども達はここをさらに上って、石材店の広場の雪の積もっている中をさらに上って行きました。これ以上のことが何も出来ないところまで、子ども達は逃げたのです。それだけのことをやり遂げて子ども達は守り抜いてくれたのです。

もし子ども達がハザードマップを信じていれば、小学校も中学校も逃げる必要はありません。津波の後で鶴住居小学校に行ってみました。ハザードマップの外で、こんな所まで津波が来るはずないという3階に軽自動車が挟まっています。津波は屋上を越えています。もし子ども達がハザードマップを信じて学校に残っていたら間違いなく600人みんなが命を落としていました。そしてこの写真を見ると思うのです。鶴住居地区は地盤沈下して水たまりが出来て、家も職場も車も何もかも無くなり、壊れた堤防が残るものの、海が見えるだけになってしまった。だけど子ども達が残りました。今、釜石は復興に向いての話が色々出ています。もし子ども達が600人亡くなっていたら、おじいちゃん、おばあちゃんは生きる気力を失くすと思います。親は頑張る動機付けを失くしてしまいます。

残った600人の子ども達は将来に経験を伝えないといけないという議論をします。明治三陸津波の被災者達が僕らに伝えようとあの碑に書いてあることを僕らはなにも守らず、先人の思いを踏みにじってきた。先人の教を伝えていかないといけない。この釜石をこれからどうしていくかを子ども達が議論をしている。そんな状況ですから親たちも将来に向けて話をし始めています。それは子ども達が生き残ったからだと思うのです。子ども達が御在所の里に逃げました。そこは学校から700m離れています。700m離れていても十分な高さがありません。先生にすれば、小学1年生の子どもを連れて700mも走るわけですから、それが限度だと思っているわけです。そして、子ども達が600人も集まればトイレなどのことも考えて、避難場所を御在所にしたのです。でも、もし子ども達がそれで良しとしていたら、ここにも最終的に5m6mの高さまで水が来ていたので、保育園児、お年寄りまで含めてどれだけの人が亡くなっていたのでしょうか。「想定を信じるな。最善を尽くせ。」やはりこれがあったらからこそ子ども達の、この行動があったように僕は思います。想定なんて所詮人間の想定です。自然はその通りに振る舞ってはくれません。その時に出来る、自然に対する真摯な姿勢の中でとってくれた数々の行動の中で、子ども達は弱き者を助けながら生き残ってくれたと思います。この二つは自然に向かい合う姿勢の話です。

僕は防災を考える上で、本当の敵は自分だと思っています。それを教えたのがこの「率先避難者たれ（津波避難三原則その三）」です。考えてみてください。三陸沿岸の人はみなさん津波が来ることを知っています。逃げないといけないことは百も承知です。分かっているのに逃げていないのです。人は心配になると敵を知りたがりです。「先生どんな津波が

来るの？」と聞かれたとき答えは簡単です。「わかりません」といつも言います。「でかい津波が時に来ます。」と。以上です。どんな津波が来るのかは本来分かるはずがありません。津波がくると分かっているのに逃げないのは「敵は己」だからです。津波ではなく己なのです。そこを打破するための言葉として、「率先避難者たれ！（津波避難三原則その三）」と言ったのです。災害時には自分の安全を確保すること、まずここからです。子どもは反発してきました。「先生の言っていることはおかしい。先生は守られる立場ではなく守る立場だと言ったのに、1番最初に逃げていいの？」と聞いてくるわけです。「良いに決まっているだろう。いいか、人を助けるためには自分が生きていないと助けられないだろう。」「まず遠慮無く自分の命を守り抜け」と言うのです。

そしてもう1つ「君が逃げると言うことは周りのみんなを救うことになる。」と言いました。考えてみてください、この部屋で今、非常ベルが鳴ったとする。たぶんみんな逃げません。いわゆる正常化の偏見です。でも誰かがここから勇気を持って飛び出したなら、みんな同調していくでしょう。率先避難者は多くの命を救います。今回も最初はサッカー部の子ども達です。僕が子ども達に教えた防災教育は何だったのかと考えると、知識ではなく明らかに【姿勢】です。大したことは教えていません。知識とすれば「早く逃げなさい。高く逃げなさい。」ということだけです。

あと、僕がやってはいけないと思っているのは、脅しの防災教育です。「怖いぞ、怖いぞ。」と脅すパターンです。これは恐怖喚起のコミュニケーションなので長続きしません。車の免許の更新と一緒にです。交通事故の写真をたくさん見せられると、帰り道では人がどこからでも飛び出してくるような気がしますが一晩寝ると元に戻ります。人間恐れながら生きていくなんで辛くてしょうがありません。釜石の子ども達にこれをしていたら、子ども達は釜石のことを嫌いになるだけです。そして真っ当な津波防災教育なんて残りません。これはやっては駄目です。学校の先生が間違えるのは知識の防災教育です。ここでは知識を与えれば合理的な判断が出来るようになると考えています。それも違います。さっきのハザードマップを思い出してみてください。ここまでだと言われればここまでなのです。それはそうです。それを超えて、敢えて自分により大きな悲惨なことが起こるなんて積極的に考える動機付けなんてありません。上限値を規定してしまい、イメージの固定化を招き、そしてあのハザードマップに見るように、「ああよかった、うちは浸かってない。」と言って死んでいくのです。知識だけでは駄目です。姿勢があるものにとって知識は有効です。姿勢無き者にとっての知識は邪魔です。その場合、知識は上限値を規定してしまいます。受け身の姿勢を作ります。「だって役所がここまでと言ったやないか。」というそういう理解をします。

僕が釜石の子ども達に言ってきたのは、「津波なんか恐れるな。あんなものは50年、100年に一回のことだ。その日その時だけちゃんとした行動を取ればそれで良い。でも釜石に住むということは、どういうことか考えよう。釜石の海の恵みは素晴らしい。この海を未来永劫大事にしよう。でもな、未来永劫大事にするためには1つルールがある。自然におもいきり近づくといいことは恵みに近づき、災いにも近づくといいことだ。恵みはい

るけど災いはいらないとっても、そうはいかない。確かに災いの部分はある程度までは人為的に取り払ってもらえるようになってきた。これが防災だ。でも、全部取り払ってくれるわけじゃない。時に大きな津波が来たりする時に、その時はちゃんと対処しなきゃいけない。50年、100年に一回だから、恐れる必要は何にも無い。ただ、その日その時にきちっと行動をとれる自分であるかということ。だけど人間はいざと言うときに行動出来ないものだ。だから自らを律する行為としての防災だ。50年、100年に一回のその日その時だけきちっと逃げる自分であるということは、未来永劫釜石の海の恵みを享受し続けるための条件でもあり、作法でもある。つまり釜石に生きるということは、海を大事にすること、そしていざというときに逃げることだ。」

僕はこういう風に教えています。これがいいのか悪いのかは分からないけども、子ども達はその中でやってきてくれました。そして今、防災教育は大人にずっとやってきましたが、毎回同じ人でした。子どもを10年間教えると大人になるということを僕は狙ってやってきました。変わらない人たちに10年間、イライラしながら防災をやってもつまらないですよ。子どもは環境の中で常識を作り上げていきます。10年間教えるとちゃんと立派な大人になってくれます。もう10年たつと、親になって子どもを育ててくれます。子ども達の防災教育をしっかりとやると、親がもれなくついてきます。小中学校の親というのは、防災に対して関心がないわけではないのです。関心はあるけれど、50年100年先にあるかないかの話より、今日、明日の生活に追われているのです。防災にまで頭が回らない状況です。しかし子どもの話になると話は違います。最初に「君が家に一人で居るときに大きな地震がありました。君ならどうする？」と子どもに聞きます。すると、「お母さんに電話をする」と、こんな答えばかりです。そして、手紙を付けて家に持って帰らせました。「保護者の方へ お子さんの回答を見てください。あなたのお子さんは次の津波の時に生き延びることが出来るお子さんですか？」翌日、学校の電話が何度も鳴りました。8割方家に居る家庭との連携が図られるわけです。そうやって、学校でやり、家庭に広げ、地域に広げていくのです。ただし、中学生くらいならまだいいのですが、小学生の子どもは大変です。ついこの前まで保育園にいた子どもと、まもなく中学校っていう子とが一緒にいるでしょ？頑張って教えたんですが、うまく教えられませんでした。でも、うまくいくのは案外縦割りで一年生から六年生までやると、六年生が張り切ります。これはなかなか良かったですね。遊び場単位のハザードマップづくりなんかをやって、「ここの坂上がるのか？」なんて言いながら1つ1つやったりしました。時には一緒に走らないといけないこともあるので、子どもの防災教育を一所懸命やるのは僕らにしたら大変なことです。こんなことをやりながら進めていくのですが最後が一番重要です。毎年参観日にやろうとしています。子ども達に防災教育をずっとやっていると、子どもは絶対に逃げてくれると僕は確信を持っているのです。子どもはピュアです。嘘をつきません。その子ども達に向かって「津波でんでんこ」の話をしませう。「いいか、先生はな、君たちは絶対に逃げてくれると思う。でも、君たちが逃げた後、君のお母さんはどうすると思う？」初めてそこで親のことを子どもに話すのです。すると子ども達はお母さんのことが心配になって泣きそうな顔になります。だ

って子ども達はこれまで勉強してきた中で分かるのですよ。自分は逃げる、けどお母さんが迎えに来る。そうしたらお母さんがどうなるかって分かるのです。子ども達がとても心配するので可哀想になります。だから最後にやるのですが、そんな子ども達に、「いいか、今日うちに帰ったらまずお母さんに、『お母さん、僕はちゃんと逃げる。』って言いなさい。学校でどんな防災教育を受けたとか、どういう練習をしたとか、僕はあそこで遊んでいるときだったらどこに逃げるよ、ってお母さんに一所懸命言うんだぞ。」と子どもに言うのです。「お母さんがそれを信じてくれないと、お母さんは迎えに来るからな。」と、それだけ言って、子ども達への僕の直接の防災教育は終わりです。

保護者の方々には、「お母さん、今日子ども達が家に帰ったら、ちょっと唐突かも知れませんが、『僕は逃げる』と一所懸命話します。でも、こういう背景があります。」と説明します。そして、「家事をやりながらではなく、今日だけはちゃんと子どもと正面から向かい合って話を聞いてやってください。」とお願いします。そして、「うちの子どもは絶対に逃げると確信を持ったら、子どもに言ってやって欲しいことが3つあります。1つ目は、『分かった。ちゃんと逃げるんだよ』と言ってください。要は、お母さんは君が必ず逃げるということを分かったよっていう明確なメッセージを理解したと伝えてください。2つ目は、『じゃあ、お母さんも逃げる。』と言ってください。この「じゃあ」というのが大事です。「子どもが逃げるからお母さんも逃げる」というメッセージを出すことで、“僕が逃げればお母さんも逃げてくれる”と子どもは覚えるのです。3つ目は、『後で必ず迎えに行くからね。』と言ってください。」とお母さん方をお願いしました。

僕の考える「津波てんでんこ」はそういうことです。「津波の時にはてんでんバラバラで逃げろ。」と言われます。災害対応はてんでんバラバラだというのは、考えようによっては薄情にも聞こえます。お母さんが子どもの事を無視して逃げられるはずがないという批判が出るかも知れませんが、この言葉はそんな薄情な言葉ではありません。考えてみてください。災害の時、家族の当たり前の絆が被害を大きくするのです。今回もそうでした。お母さんが子どもを迎えに行き命を落としました。寝たきりのおばあちゃんを迎えに行き、若い消防隊員が亡くなりました。こうやって、絆の中で一網打尽に命を奪われていくのです。これを回避するためにはどうしたらいいのでしょうか。先人は「津波てんでんこ」、すなわち一人一人の命に責任を持つと伝えてくれたのですが、これはそれだけに留まらないのです。要は、てんでんこできる家庭たれ、地域たれということなのです。一人一人が自分の命に責任を持つということ、「津波てんでんこ」そのままです。けど、「津波てんでんこ」が成り立つためには、“子どもは子どもで絶対に逃げている”とお母さんが信頼していなければなりません。子どもが絶対に逃げると信じるからお母さんが逃げられるのです。つまり「津波てんでんこ」が可能な家庭たれと教えているのです。それは、“家族一人一人が自分の命に責任を持つということ”をお互いに信じ合える家庭たれと教えているのです。てんでんこが可能な条件を整えろと言っているのです。それは、一人一人が自覚を持っていることを家庭の中でお互い信じ合っているということなのです。

そして地域に広げるためにやったことがあります。これは帰り道です。白地図を持たせ

ました。ここが学校で碁盤の目地のように線が引いてあります。ここではどこに逃げるのかを親子で相談させます。低平地なもんですから逃げる場所がありません。このとき親子は、この家に逃げ込むことにしました。これは津波 110 番の家です。「津波子ども避難の家」というのをつくっていました。この家の方には、「子どもが逃げ込んで来たら、例え大丈夫だと思っても必ず逃げていただきたい。」とお願いしてあります。『大丈夫、大丈夫』と否定はしないでいただきたい。なぜなら、子どもはちゃんとした対応しているのに、大人がそれを制止してどうするのですか。」と話をしておくのです。そして、逃げて津波が来なかったら、「津波が来なくてよかったね。」と思いきりご機嫌で帰って欲しい。そして、「またおいでよ。」と言いながら、子どもが来たことを思いきり褒めて欲しいとお願いしておくのです。

こんなふうにご子どもの教育への参加をお願いするのですが、これによってこの人自身の教育にもなっているのです。こうやって僕は地域に広がりをもたせていきました。僕は 10 年一区切りと言いましたが、防災教育を始めて 8 年目にして 3.11 を迎えてしまった。この写真を見ると残念でなりません。釜石は 1,100 人死んだのです。だけど、この写真を見てみてください。津波が来る寸前の地域はこんな地域になっていたのです。保育園から小学生からお年寄りから高校生までみんなで避難訓練を一緒にやっています。けれど、今はもうこの町並みは無くなってしまいました。僕にあと 2、3 年の時間の猶予をくれたら、1,100 人は死ななかったと思っています。それを考えるとこの写真は本当に僕にとって見るたびに残念でならないのです。7 年間の教育を通じて子ども達はこんな子どもになっていました。この子達は今中学生ですけど、小学校の低学年から防災教育をやってきました。これはおじいちゃん、おばあちゃんを救うためのリヤカーを引く訓練です。これは率先避難者になるための大声を張り上げての練習です。僕らが逃げていることが地域の人たちに伝われば、みんな逃げてくれる。そして、自分たちが助けられる人ではなく助ける人になるには、どんなスキルが必要か子ども達はちゃんと相談していました。子ども達はこんな事をやっていたのですよ。一個一個に意味があるとか無いとかはどうでもいいことです。中学生の【姿勢】を見てやってください。消防団のおじさんに、ホースの使い方を教えてもらいました。救急隊員に応急処置や救急搬送の仕方を教えてもらいました。防災マップづくりをやりました。お母さんに炊き出しを教えてもらいました。おばあちゃんに防災頭巾の作り方を教えてもらいました。そして、先人はこの津波の碑をどういう思いでつくってくれたらうって問いかけをしていたら、子ども達はこの碑を掃除しましたよ。綺麗に磨き上げました。そして周りの草を刈りました。そして竹竿担架づくり、水上救助の練習、ありとあらゆる出来る限りのことを彼らは、自分たちが助ける人になるためには何が必要かってそんな思いの中で練習していました。それだけではありません。これはてんでんこレンジャーです。中学生は、小学生を教育すると言って、給食を早く食べて隣の鶴住居小学校に走って行くのです。そして小学校の子ども達に「てんでんこレンジャー参上！」と言って津波防災教育をやっています。本当に見上げたものです。それから、おじいちゃん、おばあちゃんのところをまわります。「おばあちゃん、どこに逃げるか分かってる？逃げられなかったら言

ってよ。リヤカーで迎えに行くからね」と声を掛けてまわるのです。そして、これは安否札と言うのですが、逃げる時に玄関に貼ればその家の人が逃げたことが分かるので、これを1,000枚つくって配りました。手作り感いっぱいです。正直もう少し丁寧につくってくれればいいのですが(笑)、それはまあ、大目に見てやってください。それでも自分たちは助ける立場だからと1,000枚もつくったのです。そして、それに応えてくれるおばあちゃんたちがいます。これ見て下さい。3月14日、雪が積もる家の前で見つけました。貼ってありました。「ふみこ、15時、栗林小学校へ避難しました。」これを見たときには、涙がでました。これがあったから助かったとか助からなかったとかじゃないんです。中学生の思いと、それに応えてくれるおじいちゃん、おばあちゃん。本当にこういう中で、子ども達の防災やっていったのです。

地域にいれば、様々な災害リスクがあります。地域の恵みを思い切り享受しながらも、時には災いに向かい合わなければなりません。自然に近づくということは、恵みに近づき災いに近づくということで、それは不可分なことです。恵みは貰うけど災いはいらぬ、本当はそう言いたいけれど無理な注文です。ただ、幸いなことに災いの部分だけは、人為的にちょっと取り除いてもらっている。幸せなことです。しかしその程度です。それであっても相手は自然です。時には大きな振る舞いをするものです。これに向かい合い、それをやり過ぎず知恵を持つということは、その地に住むお作法だと思います。

実は釜石に3月14日に入ったときに、僕は被災地を見たあと、子ども達が無事だったという情報を得て、子ども達に会いに行ってきました。本当に子ども達一人一人を、抱いても褒めてやりたくて行ったのです。あの現場を見た後でしたからね。それで、子ども達に会いに行ったら、子ども達は「おう、先生！」って言って寄ってきてくれました。こっちは「ああ、生き残っていてくれた。」という思いで涙を流しながら感動の中で子ども達に接したのです。「よく逃げたなあ。」と言ったら、子ども達は「そりゃそうでしょ？めっちゃくちや揺れたもん。」とあっさり言うのです。あのさあ、こっちがこんなに感動しているのだから、もうちょっと対応の仕様がなにかって思うほど、妙にあっさりしているのですよ。こんちくしょうって感じです。僕が去った後にも、テレビの女性アナウンサーが涙を流しながら、「頑張ったね、どうやって逃げたの？」と聞くと「いやあ、日頃やっているままで。」と答えていました。みんなはなんでこんなにさばけているのでしょうか。よく考えたらそれはそうです。考えてみて下さい。小学校2年生、3年生からずっと津波に備える練習をし、小学校の子どもをどうやって守ってやろうか、おじいちゃんおばあちゃんをどうやって守って地域の犠牲者を無くしてやろうかって、そうやってずっと考えてきた子ども達が中学生になってその時が訪れた。そして逃げ切った。やってきたことを当たり前のようにやっただけなのです。子ども達が周りからあんまり褒められることに、子ども達の方が違和感を覚えていたということです。そして、今朝顔を洗ってきたことを褒められたかのごとく、何でこんな当たり前のことをそんなに褒めてくれるのと言わんばかりに妙にあっさりしている。僕は釜石から帰って来てテレビつけたら、こんなことを言っていました。「釜石の奇跡とか言われていますが、普通にやってきたことを、普通にやっただけです。」

奇跡が起こったとか言われるけど、そうじゃない。普通にやってきて、自分たちで起こしたものです。」「そこんところよろしく」と言わんばかりでした。本当にこんちくしょうです。でも、僕はこの日思いました。我々大人が子どもたちに背中を見せています。我々が、逃げない社会にいるくせして、子ども達の命を守ろうなんてそんな虫のいい話はありません。社会全体が子ども達に背中を見せながら、そしてその中で子ども達は自分たちの常識をつくりながら育ち大人になっていくのです。今、我々が防災に対して一所懸命やるのは、我々のためだけではなく、子ども達にしっかり背中を見せるということだろうと思います。そして教育の継続は、文化の醸成だということです。自然と向かい合うということは敢えて防災という言葉だけで括るのではなく、どう生きるかということだと思います。非常に多くのことを含む事例が、この釜石の子ども達の教育だったと思います。

これで僕の話が終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

<本講演録は、滋賀県において取りまとめ、文責も本県が負うものです。>